

日語教育學與地方學的連結  
—以〈對談·場所的悲哀—李登輝/司馬遼太郎〉為例—

賴錦雀

東吳大學日本語文學系特聘教授

摘要

本論文的主旨在於闡述日語教育學與地方學之連結的重要性。根據美國外語教師協會 ACTFL 所設計的交流，文化，連結，比較和社區等 5C 的理念，為了進行交流，必須了解目標語言的文化，兼顧與語言以外領域的連結來獲取信息，並比較目標語言的文化與本國語言的文化之異同，參與多語言多文化社會活動是很重要的。從台灣日語教育的角度來看的話，在日語教學活動中應考慮到日語教育與台灣學之間的連結。本論文以〈對談·場所的悲哀—李登輝/司馬遼太郎〉為例，闡述個人課程實踐的理念。在分析了文本的語言元素與文化元素之後，從教育領域，教育目標，教學方法和教學項目說明個人的教學方案。

關鍵詞：日語教育學、地方學、李登輝、司馬遼太郎、台灣

受理日期：2021 年 03 月 10 日

通過日期：2021 年 05 月 14 日

**Connections between Japanese language education and  
local studies—Take ‘Dialogue: Sorrow of the Place-  
Lee Teng-hui/ Shiba Ryotaro’ as an example**

Lai, Jiin-Chiueh

Professor, Soochow University, Taiwan

Abstract

This paper describes the importance of connection between Japanese language education and local studies. According to the 5Cs devised by the ACTFL - Communication, Cultures, Connections, Comparisons and Communities - in order to communicate, it is important to understand the culture of the target language, to connect with non-linguistic disciplines, to compare the culture of the target language with the culture of one's own language and to participate in a multilingual and multicultural society. From the standpoint of Japanese language education in Taiwan, educational activities should be carried out with more consideration given to the connection between Japanese language education and Taiwanese studies. In this paper, I described the concept of lesson practice with the text ‘ Dialogue: Sorrow of the Place-Lee Teng-hui / Shiba Ryotaro’. After analyzing the linguistic and cultural elements of the text, I explained my teaching plans such as educational areas, educational goals, teaching methods, and teaching items.

Keywords: Japanese language education, local studies, Lee Teng-hui,  
Shiba Ryotaro, Taiwan

# 日本語教育学と地元学の連携

## — 「対談・場所の悲哀—李登輝/司馬遼太郎」を例に—

頼錦雀

東呉大学日本語文学系特聘教授

### 要旨

本論文は日本語教育学と地元学の連携の重要性について述べたものである。全米外国語教師協会 ACTFL で考案された Communication、Cultures、Connections、Comparisons、Communities という 5C によれば、外国語教育ではコミュニケーションを行うために、目標言語の文化を理解し、言語以外の領域と連携して、目標言語の文化と自国言語の文化を比較し、多言語多文化社会に参加することが重要である。台湾の日本語教育の立場から考えた場合、日本語教育と台湾学の連携をもっと考慮に入れて教育活動を実践すべきである。本論文では「対談・場所の悲哀—李登輝/司馬遼太郎」をテキストにした授業実践の構想について述べた。テキストの言語的要素、文化的要素を分析した後、教育領域、教育目標、教授法、指導項目などの指導私案を説明した。

キーワード：日本語教育、地元学、李登輝、司馬遼太郎、台湾

# 日本語教育学と地元学の連携

## —「対談・場所の悲哀—李登輝/司馬遼太郎」を例に—

頼錦雀

東呉大学日本語文学系特聘教授

### 1. はじめに

本論文は日本語教育学と地元学の連携の重要性について述べるものである。1999年にアメリカで日本語や中国語を含む7つの外国語教師会が全米外国語教師協会 ACTFL に加わって、言語別スタンダードを含む『外国語学習スタンダード』を発行した。その構成上の基本原理は5Cという外国語教育の目標領域である。5Cとは Communication、Cultures、Connections、Comparisons、Communities である。つまり、外国語によるコミュニケーションを行うために、目標言語の文化を理解し、言語以外の領域との連携を考慮に入れて情報を得て、目標言語の文化と自国言語の文化との比較をし、国内外の多言語多文化社会に参加することが重要である。

一方、地元学とは自分が住む地域を見つめ直して、地域おこしにつなげる取り組みであるが、台湾では1990年代から各行政地域を範囲として、それぞれの歴史、社会に関する研究が行われている。しかし、台湾の日本語教育学界では1970年代の蔡(1976)<sup>1</sup>による「語族別日本語教育」、1990年代の頼(1996<sup>2</sup>、2006<sup>3</sup>)による

---

<sup>1</sup> 日本国内の多くの日本語教育機関では学習者の出身地や母語を問わずに直接教授法で日本語を教えているが、蔡茂豊(1976)「中国人に対する日本語教育について—刊行の辞に代えて」では学習者の共通語で教えた方が効果的だと述べられている。

<sup>2</sup> 頼錦雀(1996)「地域別日本語教育学への提言—『台湾日本語教育学』を例として」では学習者の共通語も重要であるが、学習環境も大事なので、日本語教育においては「語族別」とともに「地域別」をもっと考慮に入れるべきだと述べられている。

<sup>3</sup> 頼錦雀(2006)「台湾における日本語教育学の体系構築試案」は頼(1996)の構想に基づいて日本語教育学研究の内容を構築したものである。

「地域別日本語教育」、2010年代の林（2014<sup>4</sup>、2016<sup>5</sup>）による「自国文化を説明する日本語教育」を除き、日本語教育学と地元学の連携についての論究は管見ではあまり見られなかった。

筆者は日本語教育と地元学との連携の重要性を深く感じているので普段、日本語教育における異文化理解及び自国文化の日本語表現能力の向上を目指して教育活動を行っている。つまり、地域別日本語教育学と台湾学の連携といった理念によるものである。そして、2018年から地域別日本語教育学の理念と台湾学という地元学の連携を考慮に入れた日本語教育プロジェクト「總結日本語文—台日文化比較」という授業を担当している。本論文では「対談・場所の悲哀—李登輝/司馬遼太郎」をテキストにした授業実践の構想について述べたいものである。

## 2. 先行研究

### 2.1 語族別日本語教育

蔡（1976）は異なる言語の使用者を別個に集め、集まった人たちの共通の言語で教えるという語族別日本語教育を唱えた。言い換えれば、日本国内における日本語教育は語族別か国別によってクラス編成による方式がより効果的であり、妥当であるが、日本以外の国では、同じ共通語を使う人にはその共通語を使って日本語を教えるということである。この語族別日本語教育は台湾で執行されたのみならず、日本にもシンガポールにも反響を呼んだ。それで東呉大学に台湾人日本語教師の海外派遣の依頼が入った。日本のほうは1982-1988年における拓殖大学留学生別科への日本語講師派遣であり、シンガポールのほうは1991-1993年におけるシンガポール

---

<sup>4</sup> 林長河(2014)「龍山寺を例にした自国文化を説明する日本語教育の模索—語学教育理論の応用と課題」は専門日本語教育、コース・デザイン、内容重視教育などの理論を取り上げ、自国文化を説明する語学教育理論を探求したものである。

<sup>5</sup> 林長河(2016)「台湾日本語学科の自国文化に関する科目のコースデザイン—現状と課題」は「自国文化」を日本語の授業に入れるべきだと述べられた日本語教育学を実践した学際的な試みである。

国立大学日本研究科への日本語講師派遣であった<sup>6</sup>。

但し、考えてみれば学習者の共通語と共に学習者のいる環境のことも大事にすべきだと思うので、頼(1996、2006)で述べられているような地域別日本語教育の理念も大事ではないだろうかと思われる。

## 2.2 地域別日本語教育

(表 1) 地域別日本語教育の学的構築－台湾の場合

1. 台湾と日本社会・文化	
1.1 台湾と日本との関係	1.2 台湾に見られる日本文化
1.3 台湾における日本理解 (社会・言語・文学・文化)	1.4 台湾における日本文化受容
1.5 元台湾人のアイデンティティ	1.6 日本の社会と文化
1.7 台湾の社会と文化	
2. 台湾と日本語	
2.1 台湾における日本語使用	2.2 台湾の日本語政策
2.3 台湾語化した日本語	2.4 日本語化した台湾語
3. 台湾人と日本語	
3.1 台湾人における日本語知覚	3.2 台湾人日本語話者の心理
3.3 台湾人の日本語学習心理	3.4 台湾人日本語学習者のタイプ
4. 台湾人に対する日本語教育	
4.1 実践的知識・能力	4.2 カリキュラム編成、教育課程編成
4.3 日本語教育と対照日本語学	4.4 日本語教授法
4.5 日本語指導法 (聴解・発音・発話・読解・作文・翻訳・通訳・言語文化指導)	
4.6 専門日本語教育法	4.7 学習者日本語の実態
4.8 日本語学習方策	4.9 試験、評価
4.10 誤用分析と訂正	4.11 教材分析、選定、開発
4.12 中日辞典・日中辞典の利用法	4.13 日本語学習環境
4.14 日本語教室運営	4.15 日本語教育支援システム
4.16 日本語情報利用能力・利用法	4.17 教育工学
4.18 日本語教育の実態と歴史	
5. 日本語学	
5.1 日本語学と言語学 (世界における日本語 日本語の種類 応用日本語学)	
5.2 日本語学 (日本語の構造 音声・音韻体系 形態・語彙体系 文法体系 意味体系 語用論的規範 文字と表記 日本語史 など)	
5.3 中国語学 (中国語の構造 音声・音韻体系 形態・語彙体系 文法体系 意味体系 語用論 文字と表記 など)	

(頼(2006)による)

<sup>6</sup> 詳しくは頼錦雀(2019a)「蔡茂豊教授與台灣日語教育」を参照されたい。

筆者は台湾・東呉大学（1980年～現在）、日本・拓殖大学（1987-1988年）及びシンガポール国立大学（1991年）における日本語教師としての体験により、学習者の共通語と共に学習環境のことも大事にすべきだと思ったので、1999年に地域別日本語教育を提唱し<sup>7</sup>、2006年に地域別日本語教育の学的構築私案を提出した<sup>8</sup>。表1で見ると、台湾における日本語教育学は学習者、学習環境と文化、目標言語の日本語の教授法及び学習者の生活言語を考慮に入れた対照日本語学<sup>9</sup>といったような内容である。学習者の生活言語と環境、文化を考慮に入れるのは、言い換えれば、日本語教育学と地元学の連携を考えるとということではないだろうか。

### 2.3 自国文化を説明する日本語教育

本名（2004）<sup>10</sup>は日本語教育では日本語学習、日本文化を知る、自国文化を説明する、という三つの要素があると述べている。林（2014）では日本語学科のカリキュラムはほぼ日本語学習、日本事情の科目で埋められており、台湾に関するインプットは残念ながら見逃されている、と述べられている。そして、林（2016）では自国文化と関係している授業を持っている教師にインタビューを行い、コースデザインに関する内容を調べた結果、シラバス・デザインに伴う負担、教授法の模索、評価法の模索、金力・体力・圧力の掛かる授業、プレゼンのスキルの養成といった5つの特徴を発見し、自国文化の教育は、斬新的で、イノベーションに富んだ新タイプの日本語教育で、学生に好評であるが、総合的に見れば、学習者のニーズに応える学習者中心主義の実践、実務・実践に重きが置かれる教授内容、日本語教育「学」を实践した学際的な試みなどの意義が

---

<sup>7</sup> 頼（1996）を参照されたい。

<sup>8</sup> 頼（2006）を参照されたい。

<sup>9</sup> 「対照日本語学」は奥村三雄教授の造語である。恩師の故・奥村三雄先生（九州大学名誉教授・東呉大学客員教授）は1993年に東呉大学日本語文学科集中講義及び日本語教育国際会議で、台湾における日本語学研究は、学習者の生活言語である台湾中国語と日本語を比較することが重要だ、という「対照日本語学」を提唱した。

<sup>10</sup> 詳しくは本名信行（2004）「日本語で自国文化を説明する意義とそのシラバス研究開発について」を参照されたい。

ある、と述べられている。このような日本語教育学の理念は頼（1996、2006）の地域別日本語教育学の理念と同質だと思われる。

## 2.4 台湾の地元学

台湾では1972年7月、行政院国家科学委員会とアメリカ国家科学基金会の助成で張光直教授が主催する「臺灣省濁水大肚兩流域自然與文化史科技研究計畫」は戦後の台湾における地域研究を開始した。その後、各地方による地方調査の結果が多く刊行され、台湾の地元学の基礎を築いた。呉（2016）によると、2016年では都市の「花蓮學、臺東學、屏東學、高雄學、南瀛學（臺南學）、嘉義學、雲林學、彰化學、南投學、臺中學、苗栗學、新竹學、桃園學、臺北學、基隆學、澎湖學、金門學、馬祖學」と地方の「淡水學、北投學、麻豆學」があり、それぞれ学術シンポジウムか地方史の研修会を開催し、関係調査研究結果や雑誌、紀要を出版したりコーパスを構築したりしていた<sup>11</sup>。

一方、大学においては2021年現在、亞洲大学と朝陽大学は「霧峰學」、佛光大学は「宜蘭學」、屏東大学は「屏東學」、金門大学は「金門學」の授業を開設している。そして、2020年6月3日、中国文化大学では「陽明山學」に力を入れる、と発表された。

台湾では林（2016）で指摘されたように、観光業に携わる人材育成のために「導覽日語」という科目を開設して学習者に台湾を紹介する日本語能力を養成する日本語教育機関があるが、日本語教育と地元学との連携について言及したのは傅(2019)<sup>12</sup>のほかにはあまり見られないようである。傅(2019)は日本語教育と地方創生の連携の理念による「日語写作」と「導覽解説日語」の授業を紹介してい

---

<sup>11</sup>台湾の地元学については、黄翠芬(2019)「朝陽科技大學通識教育—地方學與服務學習成果會報」、呉文星(2016)「台灣學的區域研究」、實踐大學建築設計學系(2011)『台北學』、鍾明光(2006)「從美濃學到GIS—美濃的地方學實踐經驗(上)(下)、陳奇中(2017)『金門學概論』、林黛琿(2018)「通識教育課程辦法」などを参照されたい。

<sup>12</sup>傅玉香(2019)「導覽解説日語—與地方創生之連結」は教育部【基礎語文及多元文化能力培育計畫】の成果の一部であるが、学習者の自文化を日本語教育活動に入れた例を述べたものである。



る。例えば、台湾における牛蒡作りと牛蒡料理、牡丹社事件、屏東と日本、日本漫画における屏東というような課題には日本語教育と地方創生との連携の理念が考慮に入れられている。

## 2.5 台日文化比較－キャップストーン「總結日本語文」の場合

「總結日本語文－台日文化比較」<sup>13</sup>は東呉大学における日本語文教育キャップストーン授業の一環である。複数の教授法（Multiple Teaching Methods）及びアクティブ・ラーニング（Active learning）の方略を用い、実作の作成作業を通して、学習者の日本語による創作力の向上を目指す授業である。テキストの読解や比較、翻訳、意見交換、報告作成、口頭発表の作業によって学習者の日本語の各技能の能力向上及び台日比較文化理解の深化を目指しているが、グループワークで協働精神を育成するのも本授業の目標の一つである。実作の作成に当たり、PDCA（Plan-Do-Check-Act）という循環式の管理方針に基づく計画書、中間報告、期末報告を要求するが、期末報告は二部ある。印刷文を提出する前に、学習者は日本語によるプレゼンテーションをしなければならない。以下、レポートの例をいくつか紹介する。

### 2.5.1 菓子

台湾の菓子も日本の菓子も中国の影響を受けたが、共通点があると共にそれぞれ違った特徴もある。

(1) 日本では禅宗の関係で茶菓子が流行っているが、台湾では中国東晋時代(317～420年)からあった茶菓子の影響を受けている。

(2) 日本では季節の移り変わりにあわせて花びら餅、椿餅、鶯餅、ぼた餅、粽、花見団子、おはぎなど形や色合いの綺麗な和菓子がいろいろあるが、台湾では清明節の鼠曲草糰、端午節の粽、中秋名月の月餅、旧正月の大根餅、結婚式の団子、生後四

---

<sup>13</sup> 東呉大学「總結日本語文」科目について詳しくは頼錦雀(2019b)「大学日本語教育におけるキャップストーン的位置づけ－東呉大学「總結日本語文」：台日比較文化の場合」を参照されたい。

か月の赤ちゃんの収涎餅などがある。

(3) 日本では祭神用としての神饌菓子や慶弔諸事に供される引き菓子がある。台湾にも紅龜、紅龜粿、壽桃、鼠曲草粿、大根餅などの祭神用菓子がある。

### 2.5.2 台湾の寿司文化

台湾で寿司が人気商品になった理由は次のようにあげられる。

- (1) 「お寿司＝ヘルシー」という印象である。
- (2) 寿司はダイエットに向いている、いい食べ物である。
- (3) 生ものが食べられない人でも、あぶったものや醤油漬けにしたものなどで様々な味を楽しむことができる。
- (4) 寿司はどこでも買えるので便利である。

### 2.5.3 職業環境

台湾と日本の職業環境について次のようなことがあげられる。

- (1) 台湾も日本も深刻な職業環境の問題がある。
- (2) 日本人の平均労働時間は台湾人より長いが、残業代は台湾より低く、そして、過労による死亡数の割合は台湾より遥かに高い。
- (3) 育児休業については、日本では休業に関する法令は不完備と言うほどではないが、近年の経済不安や社会からのプレッシャーのため、育児休業を取る男性の人数は限られている。それに、出産後の女性にとって、日本の職場環境は厳しい。一方、台湾では男女格差は日本ほど大きくないが、男性の育児休業の件数はまだ低い。
- (4) 男女格差を小さくするために、奨励制度が必要である。

### 2.5.4 空気を読む

日本人は歴史と国民性の影響で、一般的に台湾人より「チームワーク」、「周りにいる人たちの意見」などが大事だと思っている。それは日本人の全体主義と調和主義によるものだと思われる。それに、日本人はいつも相手の立場に立って考えて、適切なあいづちを打つ。それは日本人の良い点であるが、空気を読み過ぎれば悪い影

響を受けて同調圧力、過剰適応症候群気味になる恐れがある。それに対して、台湾人はあまりあいづちを打たないので、発言後、その場がシーンとした空気になることがよくある。相手の話を真面目に聞いているのであいづちを打つ習慣にはならなかったのではないか、と思われる。

### 3. 地元学との連携を考慮に入れた日本語教育教材の薦め

#### －「対談・場所の悲哀－李登輝/司馬遼太郎」を例に

地元学との連携を考慮に入れた日本語教育ではまず、教材のことを考えなければならない。陳（2019）<sup>14</sup>で述べられているように、高校日本語教育で台湾のグルメを日本語で紹介する指導事例が見られるが、2021年現在、台湾の高校でも大学でも日本で出版された『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）が多く使われている。確かに簡単なものから複雑なものへ、という提出順は初心者には向いているかもしれないが、しかし地域別日本語教育学的見地から見た場合、内容のどこにも台湾関係の言葉が見られないこの教材は学習者心理から見ても地域別日本語教育学から見ても、本当に台湾の学習者に適しているかどうか、考えものである。自文化の日本語表現を身に付けるには、自文化関係の語彙や表現を覚えて、それを使いこなせるようにするのがコツだと思われるが、その前提は自文化に関する語彙や表現に触れることである。

林（2014）や陳（2019）で述べられているように、台湾の観光スポットやグルメがよく日本語教育現場で教材として取り上げられている。しかし、台湾と日本は正式の国交はないが、経済や文化においていろいろな交流がなされているし、その交流に関する文章も少なくない。そして日本植民地時代に創られた台湾関係の小説もあ

---

<sup>14</sup> 陳曉迪(2019)『台湾グルメ紹介を導入した高校日本語授業の実践研究－異文化コミュニケーション能力の養成を目指して』は新竹・光復高中応用日本語科における日本語教育活動に自文化を入れた実践をまとめた論文である。

るし、現代台湾が素材になった日本語作品や書籍もある<sup>15</sup>。このようなものはすべて台湾における日本語教材として考えられるが、本論文では台湾人のアイデンティティに関する「対談・場所の悲哀－李登輝/司馬遼太郎」（以下「対談」ということもある）を例に考えてみたい。

### 3.1 対談の経緯

1994年3月30日、作家の司馬遼太郎氏が台北で李登輝総統と対談した。司馬氏は「場所の苦しみ」をテーマに考えていた。李総統は曾文恵夫人と相談した末に「台湾人に生まれた悲哀」を語りたい、と司馬氏に言った。その一問一答は日本の『週刊朝日』1994年5月6・13日合併号)に載り、それが台湾の「自立晩報」「民衆日報」に転載されて、一躍「生為台湾人的悲哀」が台湾での流行り言葉になったのである<sup>16</sup>。

### 3.2 テキストの言語的要素

「対談・場所の悲哀－李登輝/司馬遼太郎」における司馬氏の発言の部分は、日本語能力検定試験の語彙区分から見れば、N5級語彙は171語、N4級語彙は85語、N3級語彙は159語、N1級語彙は57語、級外語彙は174語ある<sup>17</sup>。但し、漢字表記から見た場合、N1級の「一挙、異民族、運命、獲得、漢語、規模、業績、公、国土、古代、最末期、雑談、師、自尊心、私物、充実、植民地、水田、政権、中立、天下、内部、二派、発言、布告、武装、腐敗、文化大革命、暴力、牧師、民族、模索、野党、欲、領土、例」や級外の「嗚呼、青写真、諳誦、一大損失、一介、一新、隱棲、隱喻、英国、王朝、華僑、郝柏村、家老、漢、紀行、京都、玉杯、軍人、継承、憲兵、豪州、皇帝、国内、古来、根源、広東、雑居地、薩摩、慘禍、

<sup>15</sup> 例えば、第153回直木賞受賞作の東山彰良『流』（2015、講談社）、第64回日本エッセイスト・クラブ賞受賞作の温又柔『台湾生まれ 日本語育ち』（2015、白水社）など。

<sup>16</sup> 本研究のテキストは『台湾紀行 街道をゆく10』（朝日新聞社）による。

<sup>17</sup> 日本語能力検定試験の語彙区分の語数はリーディングチュー太による調査結果である。

三皇五帝、自浄、四川省、実権、師弟、司馬、周恩来、酒席、蔣経国、少数、初期、書生論、清、清朝、政治家、世界中、占拠、戦車、宣統帝、宋、総統、粗暴、孫文、第一高等学校、大中華帝国、台湾、中華、中華民国、中国、中国語、中国人、長州、町人、帝国主義、適正、天安門、唐、鄧小平、同窓、派閥、藩、藩政、飯店、版図、番頭、東海岸、福建、武闘、北京、遍歴、法治国、法治制、幕末、無主、明治、毛沢東、李登輝、理念、琉球、寮歌、両派、歴代」などは台湾人日本語学習者にとって日本式の読み方が分からないのもあろうが、意味理解では大丈夫だと思われる。

一方、李総統の発言の部分は N5 級語彙は 182 語、N4 級語彙は 100 語、N3 級語彙は 147 語、N1 級語彙は 41 語、級外語彙は 109 語ある。級外語彙の「院長、家計簿、割譲、漢、記、旧約、共産党、空軍、継承、甲午、後継、江沢民、国民党、自体、司馬、終戦、修得、蔣経国、新疆、籍、戦車、戦略、総統、族、率先、台湾、中華人民共和国、中華帝国、中華民国、中国、中国共産党、中国語、中正国際飛行場、中日、徹底的、鄧小平、内戦、成田、日清、任期、悲哀、不可能、北京、民選、陸軍、李鴻章、李登輝、臨終」と N1 級語彙の「改革、会談、外来、観点、犠牲、行政、郷土、拒絶、軍事、元首、権力、公、始末、主権、植民、処分、進出、人民、政権、政策、聖書、宣言、戦闘機、聴講、天才、統治、討論、内部、敏感、民族、理論」などは台日における常用漢字の字形の違いがあるが、台湾人学習者にとって意味理解可能の単語だと思われる。

習うより慣れろ、と言われるように、触れて使ってみることが重要である。仮名表記語と漢字仮名混じり表記語の場合は意味理解がポイントであるが、漢字表記語の場合は読み方が分かれば使いこなすことが可能である。ちなみに、台湾事情の文化語彙は、台湾語の音声に忠実な発音でいいので、これらの漢字表記語にも発音の問題はないと思われる<sup>18</sup>。

---

<sup>18</sup> 台湾事情を表す文化語彙の読み方については、頼錦雀（2019c）「台湾における文化詞の日本語訳」を参照されたい。

(表2) 「対談」における司馬氏の使用語彙と李総統の使用語彙

級別	司馬氏の部
N5 171 語	ああ、あう、朝、あと、あの、新しい、ある、いい、いう、言う、いく、行く、いつ、いま、嫌、いる、上、生まれる、売る、多い、大きな、起きる、おなじ、同じ、おわる、か、が、金、から、帰る、書く、側、聞く、きたない、国、くらい、ぐらい、くる、来る、ことし、ことば、言葉、この、これ、ころ、さん、しかし、じゃ、する、そう、その、それ、た、だ、たい、高い、だけ、出す、たち、たつ、楽しい、たり、だれ、小さな、近い、違う、ちょうど、つかう、使う、つくる、つける、務める、て、で、手、手紙、できる、です、でも、と、戸、という、どうして、どうも、とき、どこ、ない、ながら、など、なる、に、願う、寝る、の、は、ば、入る、初めて、花、話、話す、東半分、一つ、ひとり、暇、広い、二つ、二人、古い、へ、ほか、ホテル、ます、まだ、まで、道、皆さん、みる、も、もう一度、持つ、もっと、もの、物、や、山、読む、やる、ゆっくり、よい、よく、わかる、忘れる、私、を、ん、一、英語、階段、学校、漢字、九、牛乳、今日、五、語、五時、歳、十、新聞、先生、全部、他、大変、七〇、何、二、日本中、年、八、半、人、本、前、万、閩南語、四、旅行、廊下、六、百
N4 85 語	あいさつ、赤ちゃん、アメリカ、うける、牛、うまい、大きさ、おかしい、おこる、おっしゃる、音、驚く、思う、硬い、必ず、彼、考える、君、きめる、比べる、けれど、こう、こと、心、島、しまう、ずいぶん、ずっと、だから、確か、たとえば、ため、だめ、力、つかまえる、つもり、とくに、届ける、な、逃げる、残る、の、に、場所、ほど、ほめる、みつける、昔、珍しい、焼く、やはり、やれる、よう、ようだ、読める、よろこぶ、よろしい、わけ、安全、以外、以上、関係、技術、気分、教育、経験、経済、県、石、最後、時代、市民、社会主義、自由、小学校、政治、政治学、世界、中学校、途中、非常、法律家、無理、両方、歴史
N23 159 語	あるいは、合わせる、偉大さ、いちいち、いったい、イメージ、いわば、訴える、えらい、神、考え、食う、くずす、くだく、苦しみ、苦しい、殺す、騒ぎ、こんにち、さぐる、さらに、じつに、せいぜい、そこ、そのまま、だけど、ただ、たたく、たとえ、ついに、つまり、出来上がる、テーマ、ところ、ところが、ところで、として、とも、名、流れ、為す、なんとか、にとって、煮る、ね、残す、のぞく、場、パーセント、激しい、ふしぎ、ほう、ボーイ、まあ、ます、間違う、守る、身、みたい、みやげ、みる、むしろ、むだ、めでたい、もっとも、モデル、元、求める、雇う、よ、ようやく、ヨーロッパ、より、笑い、われわれ、曖昧、暗記、以後、意思、以前、一応、得る、奥、解決、外交官、飼う、学者、過去、偶然、苦痛、区別、苦勞、結局、結論、現在、国民、国家、詩、事件、市場、自身、思想、自治区、実際、実際、指導者、種、周辺、住民、主義、首相、純粹、情報、人物、人類、人類史、水準、世紀、青年、政府、全体、先端、存在、他、対策、第三次高等学校、大統領、代表、大陸、地、地域、知識、地帯、的、同時、東洋、努力、日本、日本史、日本人、人間、能力、配達、博士、副、無事、不思議、物騒、文明、報告、本来、明、民主的、矛盾、唯一、余裕、乱暴、話題
N1	上がり、いける、教え、襲う、おれ、掲げる、かつて、コントロール、サイズ、侍、センス、乳、務まる、なん、はらはら、べし、紛

57 語	らわしい、むちゃくちゃ、むろん、世、悪、一挙、異民族、運命、獲得、漢語、規模、業績、公、国土、古代、最末期、雑談、師、自尊心、私物、充実、植民地、水田、政権、中立、天下、内部、二派、発言、布告、武装、腐敗、文化大革命、暴力、牧師、民族、模索、野党、欲、領土、例
級外 174 語	言い分、イギリス、営み、インドネシア、ウイグル、受け、海千山千、生みだす、生む、越後、江戸、多く、岡山、押し流す、おちおち、お客、河井、河井継之助、食える、紅萌ゆる、けど、ゲリラ、ゲルマン、こういう、この世、ごろ、最たる、坂本竜馬、さぞかし、搾る、シンガポール、新疆ウイグル、スウェーデン、数カ月、すぐさま、ステーツマン、スペイン、背骨、そういう、それにしても、荘厳さ、タイ、タウンゼント・ハリス、立ち退く、チベット、ドイツ、ドイツ語、どうしても、遠ざける、徳川、どろどろ、内蒙古、長岡、何ぞ、何もの、根づく、に対して、ノウハウ、引き締まる、一昔、フランス、フランス語、プロレタリア、平然と、ボアソナード、ボスニア、ポリティカル、三井、ミッテラン、メシ、メタファー、モンゴル、やってくる、山田方谷、大和、山中、やりあう、よしみ、ラテン、リー・クワン・ユー、ルクセンブルク大公国、ロシア、をもって、嗚呼、青写真、諳誦、一大損失、一介、一新、隠棲、隠喩、英国、王朝、華僑、郝柏村、家老、漢、紀行、京都、玉杯、軍人、継承、憲兵、豪州、皇帝、国内、古来、根源、広東、雑居地、薩摩、惨禍、三皇五帝、自浄、四川省、実権、師弟、司馬、周恩来、酒席、蔣経国、少数、初期、書生論、清、清朝、政治家、世界中、占拠、戦車、宣統帝、宋、総統、粗暴、孫文、第一高等学校、大中華帝国、台湾、中華、中華民国、中国、中国語、中国人、長州、町人、帝国主義、適正、天安門、唐、鄧小平、同窓、派閥、藩、藩政、飯店、版図、番頭、東海岸、福建、武闘、北京、遍歴、法治国、法治制、幕末、無主、明治、毛沢東、李登輝、理念、琉球、寮歌、両派、歴代
級別	<b>李総統の部</b>
N5 182 語	会う、あと、あの、頭、あまり、ある、いい、いう、言う、家、いく、行く、痛い、いちばん、いつも、いま、嫌、いる、入れる、う、うち、生まれる、多い、大きい、大きな、お金、教える、遅い、男、同じ、覚える、終わる、か、が、買う、返す、帰る、から、がる、聞く、国づくり、ぐらい、くる、来る、声、ここ、こっち、ことば、言葉、子供、この、困る、これ、ころ、さん、しか、しかし、じゃ、住む、する、そう、そして、その、それ、それから、た、だ、たい、だけ、だす、出す、たち、だれ、違う、次、強い、手紙、使う、つくる、つける、て、で、できる、出る、です、でも、でる、と、という、どう、どうして、とき、とても、とる、ない、ながら、なくちゃ、なぜ、など、なる、に、荷物、ねる、寝る、の、ノート、は、ば、入る、初め、話、話す、早い、日、ひと、人、ひとつ、一つ、開く、豚肉、二つ、二人、へ、前、ます、まだ、まで、右、三つ、皆、難しい、村、目、も、もう、持つ、もっと、もの、や、やる、呼ぶ、弱い、わかる、忘れる、私、を、ん、一、一緒、外省人、学校、九、五、語、三十年間、仕事、自分、十、週間、食堂、全部、掃除、外、大学、大切、大変、台湾人、中、七、何、二期、二週間、二度、二二八事件、二年間、年、八、飛行機、病気、勉強、問題
N4	アジア、アメリカ、田舎、受ける、うまい、驚く、思う、必ず、か

100 語	もう、彼、彼ら、考える、決める、くれる、けれど、こう、心、こと、この間、ごらん、これから、怖い、さかん、盛ん、させる、し、しれる、せる、そんな、だいぶ、だから、たとえば、ため、泥棒、な、なかなか、なさそう、なさる、ぬ、残る、ばかり、始める、はず、はっきり、びっくり、敏感さ、別に、ぼく、負ける、まず、回る、見える、昔、息子、もし、もらう、役に立つ、夢、よう、よる、安心、一度、雲林県、科学、家内、機会、教育、興味、空軍力、計画、経済、研究、交通、国際、最近、最後、時代、社会、自由、出発、女性、政治、世界、世話、戦争、専門家、地理、七十代、反対、日、飛行場、必要、部長、別、返事、無理、両方、歴史
N23 147 語	遭う、危うい、いま、いわば、うっかり、起こる、治める、おく、おそらく、親、かかわる、重ねる、語る、考え、感じ、グループ、苦しみ、こんなに、叫ぶ、さまざま、しゃべる、シリーズ、進める、すべて、攻める、そう、そこ、そっと、そのまま、それなのに、たたく、だって、違い、テーマ、ですから、として、とにかく、なか、なんて、なんとか、握る、ね、残す、話し合い、話し合う、プロ、任せる、認める、みる、昔流、もともと、者、役割、やら、許す、よ、夜、笑い、われわれ、曖昧、意義、意思、一度、一省、一方、以来、援助、演説、外交、学者、拡張、学問、活動、完成、期待、基本、軍隊、結論、憲法、権利、工事、構造、交代、考慮、国民、国家、財産、最終、参加、事件、持参金、自然、子孫、実現、実際、指導者、修正、住民、主義、主張、状況、世紀、整備、政府、生物学、節約、選挙、騒音、大、第三、大統領、第二、大陸、台湾省、団地、地、知識、中心、直接、的、哲学、鉄砲、党、統一、独立、都市、土地、二期、日常、日本、人間、年間、農業、農村、博士、発表、批判、評価、付近、副、平気、変化、満足、民主、民主化、用心、理解
N1 41 語	いける、かつて、絶える、類、取り扱い、取り寄せる、成り立つ、紛らわしい、改革、会談、外来、観点、犠牲、行政、郷土、拒絶、軍事、元首、権力、公、三杯目、始末、地元、主権、植民、処分、進出、人民、政権、政策、聖書、宣言、戦闘機、聴講、天才、統治、討論、内部、敏感、民族、理論
級外 109 語	頭ごなし、アツと、あれだけ、いえる、居候、痛める、いろんな、岩波、インドネシア、エジプト、多く、おくび、抑える、カイロ、書きつける、肩書き、かも、カ月、考え方、きどる、九カ月間、けしからん、けど、こういう、コミュニティー、三カ国、シェークスピア、シンチャン、スハルト、そういう、それだけ、たたきつぶす、チベット、つくりあげる、って、積み重ねる、東南アジア、なり、における、後に、握り拳、に対して、ばかげる、人々、ピンポン、フィリピン、ヘリコプター、変てこ、ボスニア、ほら、まだまだ、もう少し、モーゼ、モンゴル、やってくる、やりなおす、ラモス、リタイア、ルーツ、ろくろく、院長、家計簿、割譲、漢、記、旧約、共産党、空軍、継承、甲午、後継、江沢民、国民党、自体、司馬、終戦、修得、蒋経国、新疆、籍、戦車、戦略、総統、族、率先、台湾、中華人民共和国、中華帝国、中华民国、中国、中国共産党、中国語、中正国際飛行場、中日、徹底的、鄧小平、内戦、成田、日清、任期、悲哀、不可能、北京、民選、陸軍、李鴻章、李登輝、臨終

注：数字は異なり語数を表す。



文型においては、jWriter<sup>19</sup>で調査した結果、対談の全 129 文のうち、以下のような初中級の機能表現の外は、ほとんどは初級文型である。

(表 3) 「対談」における初中級文型

文	文型	文	文型
2	～というのが～。	24	～であって、～。
4	～というのではなく、～。	29	～ことはない、
5	～こともなく、～。	31	～であっても、～。
7	～しようとしている。	32	～は～としては～。
8	～としたら～。	47	～があるんです。
11	～ですからね。	60	～だという～
15	～にしても～。	93	～上では。
16	～なのかと考える。	102	～と同時に
21	～にすればいい。	116	～ことがある。
23	～としては～。	129	～ないように、～。

### 3.3 テキストの文化的要素

「対談・場所の悲哀－李登輝/司馬遼太郎」における文化的要素は次のようにまとめられる（出現順）。

- (1) 朝五時になったら牛乳受けに牛乳が入っている。（p.378）
- (2) フランスが出来上がった百何歳の国としたら、民主的な台湾は生まれて五、六年、まだ赤ちゃんの国です。（p.378）
- (3) 台湾人に生まれた悲哀（p.378）
- (4) 明治四年（1871年）、台湾の東海岸で琉球の人が殺された事件がありました。（p.379）
- (5) 台湾島は無主の国である。（p.379）
- (6) 日本籍に入りたい人は残りなさい。財産もそのまま認めます。嫌な人は二年間のうちに大陸に帰りなさいというものでした。（p.380）
- (7) 中国共産党は台湾省は中華人民共和国の一省なりという。変てこな夢ですね。台湾と大陸は違った政府である、いまはこ

<sup>19</sup> jWriter は李在鎬らが構築した学習者作文評価システムである。

- こまでしかいえません。(p.380)
- (8) この世で中華という言葉ほど紛らわしいものもない。  
(p.380)
- (9) 中国人という言葉も紛らわしい。(p.380)
- (10) 台湾は台湾人の国ですね。(p.381)
- (11) 二・二八事件(p.382)
- (12) いまは郷土の教育が多くなってきました。(p.384)
- (13) 台湾語を話すこと自体が大変でした。(p.385)
- (14) かつてわれわれ七十代の人間は夜にろくろく寝たことがなかった。(p.386)
- (15) こんにち水準の高い自由と法治制を獲得した。(p.386)
- (16) 郝柏村(p.386)
- (17) 「公」の国家、社会(p.386)
- (18) 中正国際飛行場の拡張工事がうまくいってない(p.387)
- (19) 成田のような事件(p.387)
- (20) 憲法修正、民主改革を全部完成させ、そして最終的には、  
総統の選挙を民選で、直接にやる。(p.387)
- (21) 北京の指導者が台湾に対して頭を痛めている三問題  
(p.387)
- (22) 李総統の実際的な外交(p.388)
- (23) 植民地時代に日本が残したものは大きい。批判する一方で、  
もっと科学的な観点から評価しなければ、歴史を理解すること  
はできないと思うな。(p.390)
- (24) 「居候、三杯目にはそつと出し」とは？

以上のことをまとめてみると、平和な日常生活(1)、民主国家(2)、台湾人・台湾事情(3、5、4、11~16、18、20)、台湾人のアイデンティティ(6~10、17)、李総統の政治観(22~24)、日本事情(19)、台中関係(21)のように分けられる。これらの文化的要素を日本語で説明できるように指導するのが日本語教師の

仕事であるが、それには台湾事情およびその台湾事情の日本語表現の工夫が必要である。そして、その第一歩は「対談・場所の悲哀－李登輝/司馬遼太郎」のような文章を読むことだと思われる。

### 3.4 指導私案

本節では「対談・場所の悲哀－李登輝/司馬遼太郎」（『台湾紀行』。朝日新聞社。1997）をテキストとした指導私案を簡単に述べたいが、大学部における指導私案の前に、まず、大学院博士班「台湾日本語教育史專題討論」の授業における院生の読後感を簡単に紹介したい。

#### 3.4.1 院生の読後感

2021年1月、博士班院生に「対談・場所の悲哀－李登輝/司馬遼太郎」の読後感を発表してもらったが、台湾籍2人と日本籍5人の読後感を簡単にまとめると以下のようなになる。

- (1) 台湾は台湾人の国です。これからも、私達は台湾、台湾の民主自由を守っていかなければならないのです。
- (2) 李登輝氏は一介の学者だったのに、よく政治のノウハウを身につけられた。それも李登輝氏自分の努力によるものである。
- (3) 対談で李登輝氏は何度も「台湾人のための政治」と言っている。そして、「台湾の歴史を知る」ための教育が必要だとも説いている。これは台湾の日本語教育にも言えることなのではないだろうか。「台湾人のための日本語教育」を私たち教師はもっと考える必要がある。
- (4) 戦争と関わりを持ちたくない人間であるとともに、アジア諸国にもあまり関心がないかもしれない。自己責任のない罪悪感に苛まれるからだ。生まれる場所は選択できない台湾人の定めは、「悲哀」以外の何物でもない事実には深い寂しさを感じた。
- (5) 台湾でタクシーに乗るとき、運転手は「ありがとう」と日本語で言ってくるが、一時期は気持ちよく受け入れられなかったことがある。が、最近は、すごくうれしく感じるようになった。司馬氏が言ったように、外国人が片言でも、自分が日常使って

いる言葉を使ってくれたら、とてもうれしく、またその人を身近に感じることもある。当事者意識をもつことが重要である。

(6) 以前は「党国教育」と言って、台湾人は中国に帰るべきという思想のもと歴史教育が行われてきたが、李登輝氏以降は台湾人は台湾の歴史を学ぶべきである、郷土の教育が多くなってきたという。「対談・場所の悲哀 李登輝/司馬遼太郎」を読んで、李登輝氏の最大の功績は歴史教育を変えたことではなかろうか、と思った。

(7) 李登輝氏は日本統治下の台湾に生まれ、22歳まで日本人として生き、本省人最初の総統として台湾の民主化を進展させた人物として当然のことながら台湾史に名を残したが、今回、「対談・場所の悲哀 李登輝/司馬遼太郎」を読んで、改めて、日本史にもその名が刻まれるべき人物ではないかと考えるようになった。

院生全員が現役の日本語教師である。それぞれ読後感が違うが、対談を読むことによって台湾の歴史がもっと分かるようになり、そして言葉の教育と環境との関係も一層感じられたと思われる。これは地域別日本語教育を施す者にとっては重要なことである。日本語形式とともに学習環境のことを配慮に入れるきっかけになるからである。

#### 3.4.2 大学部における指導私案

ここでは大学の日本語文学科四年次の授業における「対談・場所の悲哀－李登輝/司馬遼太郎」の指導私案を提示したい。

- (1) 教育領域 読解、異文化理解、台日交流
- (2) 教育目標 読解により、日本語力、自文化の日本語表現力、台日異文化交流能力の向上を目指すこと。
  - (2.1) 言語スキルによる学習
    - (2.1.1)全文を音読できる。
    - (2.1.2)全文の単語、意味の理解ができる。
  - (2.2) 内容理解による学習

- (2.2.1)内容における時代背景が理解できる。
- (2.2.2)登場人物の気持ちを推敲できる。
- (2.2.3)文化事項が理解できる。
- (2.3) 読後感による学習
  - (2.3.1)自分の感想を持つことができる。
  - (2.3.2)自分の感想を日本語で述べることができる。
- (3) 教授法 内容言語統合型学習法  
(Content and Language Integrated. Learning) <sup>20</sup>
- (4) 指導項目
  - (4.1) 言語スキル
    - (4.1.1)内容理解と要約
    - (4.1.2)構成と展開の理解
    - (4.1.3)日本語の語彙と文法の理解
  - (4.2) 登場人物の気持ちに対する理解
  - (4.3) 文化事項の研究
  - (4.4) テキストに描かれた事柄に関する年表の作成
  - (4.5) 戦後における李登輝総統の歩みの考察

上述した私案は今後、機会があれば実行してみたいものである。

ちなみに、戦後、台湾は日本植民地政府から解放され、国民党政権の管轄になった。それからの李登輝総統の歩みは次のようにまとめられる。

(表 4)戦後における李登輝総統の歩み

年	李登輝総統の歩み
1946	台湾大学農学部二年次に編入。
1952	アメリカに留学。
1953	台湾省政府農林庁技士になる。台湾大学講師を兼任。
1965	アメリカへ二度目の留学。

<sup>20</sup> 内容言語統合型学習法 (Content and Language Integrated Learning。略称 CLIL。)とは教科科目やテーマの内容 (content) の学習と外国語 (language) の学習を組み合わせた学習 (指導) の総称である。詳しくは市川新剛(2015) 「CLIL 内容重視型教授法の特徴とその効果」を参照されたい。

1968	アメリカで博士号取得。台湾省農復会技正になる。台湾大学講師を兼任。
1971	国民党に入党。
1972	行政院政務委員になる。
1978	台北市長に就任。
1981	台湾省政府主席に就任。
1984	副総統に就任。
1988	蔣経国総統の死去により総統に就任。国民党主席に就任。
1990	総統に就任。
1991	「動員戡亂時期」を終了。
1994	司馬遼太郎との対談で「台湾人に生まれた悲哀」を発言。
1996	初の直接選挙で総統になる。
1999	『台湾の主張』を出版。兩岸は特殊な国と国の関係だと主張する。
2000	国民党主席を辞任。総統任期終了。
2001	李登輝学校開校。
2004	「228 百万人手牽手護台湾」運動を發起。
2015	「第二次民主改革」を提出し、「台湾人に生まれた悲哀」を「台湾人に生まれた幸福」に変えた。
2017	台湾和牛育成の会社を起業。
2020	7月30日逝去。

#### 4. おわりに

今まで台湾の日本語教育では日本事情、特に日本の優れたものを学習者に教えるような内容が多かった。その結果、一部の日本語学習者は日本語で台湾事情を紹介しなければならないとき、戸惑うことがあると述べている。普段、日本事情だけに興味を持ち、台湾事情のことに触れるチャンスが少ないし、日本語教室では台湾事情の日本語表現に関する課題に触れる機会があまりないからだと思われる。

日本語教育は言語文化教育学の一環である<sup>21</sup>。台湾における日本語教育は台日異文化理解能力及びその交流能力の育成が重要である。教育目標は日本理解とともに、台湾のことに関する日本語表現能力育成も考慮に入れるべきである。そして、テキストの選定は地域性とともに時代性も考慮に入れなければならない。悲しいことに、台湾の民主の父である李登輝総統は2020年7月30日に天国に逝っ

<sup>21</sup> 日本語教育学と言語文化教育学の関係について、詳しくは縫部（2001）を参照されたい。

た。李総統と司馬遼太郎氏との対談の内容における課題のいくつかはまだ残っている。このような時世だからこそ、台湾の日本語教育現場で「対談・場所の悲哀－李登輝/司馬遼太郎」を読む意義があるのではないだろうか。

現代では地方との連携は大学経営上の重要な政策の一つになっている。日本語教育においては地元の地域との連携の意義を考え、国際化を推進する側面で日本語人材を台湾に還元するようにもっと力を入れるべきである。本論文で述べたように、台湾の自文化に深く関わるテキストを教材とした授業によって、日本語教育学と地元学の連携が深化し、優れた台日交流人材育成につなげることができれば幸いである。

【付記】本論文は2020年11月28日に淡江大学で行われた「2020年度台湾日本語教育研究国際シンポジウム クリエイティブ・ラーニングを目指す日本語教育」で口頭発表したものを加筆したものである。二名の匿名査読者から有意義なご意見をいただいたが、深謝申し上げたい。

## 参考資料

司馬遼太郎・李登輝（1997）「対談・場所の悲哀－李登輝/司馬遼太郎」『台湾紀行 街道をゆく10』東京：朝日新聞社、pp.373-393

## 参考文献

市川新剛(2015)「CLIL 内容重視型教授法の特徴とその効果」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』名古屋：名古屋学院大学、pp.51-57

黄翠芬(2019)「朝陽科技大學通識教育－地方學與服務學習成果會報」

<https://ge.cyut.edu.tw/var/file/23/1023/img/700/88421268>

3.pdf (2020 年 10 月 2 日閲覧)

吳文星(2016)「台灣學的區域研究」『台灣學通訊』96、台北：國立臺灣圖書館臺灣學研究中心、pp.10-12

蔡茂豐(1976)「中国人に対する日本語教育について—刊行の辞に代えて」『東吳日本語教育』創刊号、台北：東吳大学、東吳大学東方語文学会、pp.1-5

實踐大學建築設計學系 (2011) 『台北學』台北：馬可波羅

鍾明光(2006)「從美濃學到 GIS—美濃的地方學實踐經驗 (上)(下)」『環境資訊中心』台北：社團法人台灣環境資訊協會

<https://e-info.org.tw/node/13993> (2020 年 10 月 2 日閲覧)

陳奇中(2017)『金門學概論』台北：東華書局陳曉迪(2019)『台湾グルメ紹介を導入した高校日本語授業の実践研究—異文化コミュニケーション能力の養成を目指して』台北：東吳大学修士論文

縫部義憲(2001)「言語文化教育学としての日本語教育学の学的構築」『広島大学日本語教育研究』11号、広島：広島大学、pp.23-31

傅玉香(2019)「導覽解説日語—與地方創生之連結」教育部【基礎語文及多元文化能力培育計畫】台北：106·107 學年度外文領域聯合成果發表會、多國語文與文化連結課程計畫辦公室

本名信行 (2004)「日本語で自国文化を説明する意義とそのシラバス研究開発について」『世界の日本語教育 日本語教育事情報告編』東京：国際交流基金日本語国際センター、pp.1-9

賴錦雀(1996)「地域別日本語教育学への提言—『台湾日本語教育学』を例として」台北：中華民國日語教育學會第二屆第四次論文發表會

賴錦雀(2006)「台湾における日本語教育学の体系構築試案」『台湾日本語教育論文集』第 10 号、台北：台灣日語教育學會、pp.91-117



- 頼錦雀(2019a)「蔡茂豊教授與台灣日語教育」『東吳外語學報』47、  
台北：東吳大學、pp.1-46
- 頼錦雀(2019b)「大学日本語教育におけるキャップストーンの位置  
づけー東吳大学「總結日本語文」：台日比較文化の場合」東ア  
ジア日本研究者協議会第4回国際学術大会、台北：台湾大学
- 頼錦雀(2019c)「台湾における文化詞の日本語訳」『台灣日語教  
育學報』第32號、台北：台灣日語教育學會、294-323頁
- 林長河(2014)「龍山寺を例にした自国文化を説明する日本語教育  
の模索ー語学教育理論の応用と課題」『台灣日本語文學報』第  
35号、台北：台灣日本語文學會、pp.351-374
- 林長河(2016)「台湾日本語学科の自国文化に関する科目のコース  
デザインー現状と課題」『台大日本語文研究』32、台北：  
台湾大学、pp.134-163
- 林黛琿(2018)「通識教育課程辦法」『金門學概論』金門：金門大  
学 [https://www.nqu.edu.tw/upload/orgstudent/attachment/  
35c6a4af0c670af6013559033fdeb601.pdf](https://www.nqu.edu.tw/upload/orgstudent/attachment/35c6a4af0c670af6013559033fdeb601.pdf)(2020年10月2日  
閲覧)
- 日本語学習者作文システム <https://jreadability.net/jwriter/>  
リーディングチュウ太 <https://chuta.cegloc.tsukuba.ac.jp/>